

静岡県現代俳句協会会報

No.130

令和3年12月25日発行



風雅の誠「新・真・深」

佐藤未來

静岡県現代俳句協会会計部長

- 一 素材の新と区切りの「新」
- 二 詩的真実の「真」
- 三 新にして真を究めれば「深」到達

所属の俳誌「ろんど」創刊主宰（故鳥居おさむ）に学びました。早いもので、創刊会員となり令和四年一月で、俳誌と共に在籍三十年を迎えます。

俳誌の入会を薦めてくれた恩師（故佐藤次元）はおさむ先生と同じ「人」誌の幹部同人でした。俳誌「人」誌は昨年八月には創刊五百号を最後に閉刊となりました。創刊主宰死去から二代目、田中貞雄先生（最高顧問）そして現在は三代目となつた主宰（すずき巴里）傘下で学んでおります。

創刊主宰から贈られた句集、一冊は『体内時計』。ルーツはいのちと時計、同じようにいつも身の内に鳴り響くようにとの願いが伝わってきます。芭蕉の「風雅の誠」もう一冊の『草清水』は自らの俳句一句から、句集名が付けられました。

足照らすひかりとなりぬ草清水 おさむ 不断の活力を以つて足元に沸く清水のように詩泉を維持したいという「夢」を追う恩師が綴る俳句理念は、一筋道です。私が、句作に行き詰まる折、いつも足元を照らし原点に導いてくれる大切な二冊の句集です。さらに二つの俳句結社での、俳句を愛す

る仲間たちとの交流により、私の体内時計は早回りし普遍の脈が打ち始めます。さて、日本列島に発令された新型コロナ緊急事態宣言は神無月の初日、静岡県下で解除されました。かれこれ二年の蟄居生活でしたが、手放しに喜んでばかりはいられないのが現実です。が、過日久方振り伊豆半島の句会へ参加しました。「席はここで良いですか？」隣席のいつもの先生が少し座布団を横に空けてくれました。「俳句は座の世界」実感でした。来月の吟行句会には万障繰り合わせて参加したいと思つています。

また、頼りない社長ですが、今年十二月会社設立三十周年を迎えることができます。

俳句生活四十年目に向かい、今一步足元を見つめ直し究めなければなりません。共に足元を確かに照らし導いてくれる俳友に序文を賜り、生涯の「一句集」俳名未来と記して一冊は一人息子に遺したいです。

芭蕉の俳諧用語「不易流行」共に目指した創刊主宰の「風雅の誠」凡人には重石でもそこからの自由律の風は魅力的です。

県現代俳句協会では、会計部長を務めさせていただいていますが、未来の声が耳元に届きましたら宜しくお願ひ申し上げます。

諸家近詠

色なき風の中で

富士市 渡邊 静風

わが俳句工房（93）

白菜

富士宮市

風岡 俊子

丘でのハモニカ拍手して過ぐ秋の蝶

富士市 渡辺 郁子

白菜や青い地球をしまい込む
思いきり深呼吸する白菜や
白菜を切って真中に我がいる

新緑のページを閉じてなお緑
星涼し剥離に倦んだ雲母片

どくだみの群れと同じく人の群れ

富士川沿いに富士山を真っすぐに見上げながら、車で三十分程の所に取引先がある。主人が運転私は助手として、一日置き位に納品の業務がある。

この車の中が私の俳句工房。窓際には

歳時記・現代俳句冊子・名句集・ボール

ペンとメモ帳が何時も置いてある。納品

先の奥まつた所に水辺公園があり、時間

の許す限り、寄つて散歩を楽しむ。一周

廻つて四十分程度であるが、整備も良く

草も刈りこまれ、平日は三、四人に会う

程度で静か。春は桜、タンポポ、ノコギ

リソウが咲き乱れ鶯があちこちで囀る。

小川のせせらぎも憩う。秋は銀杏を愛で

ギンナンを踏まぬようそぞろ歩き、彼岸

花の群生も林の中で命を燃やしている。

さらに奥まつた所に人口湖があり、晚秋

の頃より、数種類の鳴が数十羽、たまに

オシドリが来園する。時の経つのも忘れ

て双眼鏡で覗く。

車の中で、感動を書き留め、句作する。

仕事をしながら遊ぶ、贅沢な時間。

みだれ髪

小山町 佐藤 未来

花三題

秋立つや与謝野晶子のみだれ髪
神在月列島ひとつ解き放つ

句会への一句足りない夜長かな

熱海の名月

熱海市 竹 美玲

刈 田

赤き月ゆつたり昇る海正面

中秋や海にひと筋金の道

かぐや姫迎へるやうな月夜かな

熱海の名月

静岡市 滝浪さち子

不要不急

水の星新蓮根の白さ切る

かなかなかからつばの公園に風
人が消え人声が消え芒原

風

静岡市 秋山 一男

村境刈田となりて石地蔵

我思う故に我あり秋の風

円空の異形の仏豊の秋

子蜘蛛跳ぶ彼方初冠雪の富士

三文の徳百円の富有柿

雁字揚の統計釣瓶落しの日

車の中で、感動を書き留め、句作する。

仕事をしながら遊ぶ、贅沢な時間。

水の星新蓮根の白さ切る

かなかなかからつばの公園に風

人が消え人声が消え芒原

一句鑑賞

前号の「諸家近詠」の中から

大楠に凭れて見遣る夏の海

山岸 文明

静岡市 川村 敬三

楠は薬師、薬木であり古くから神社で植えられている。樹高は普通20m位であるが時に40mも越える大木もある。大きな楠は体の健康にまた神仏の加護であり心の拠り所でもある。その大楠に凭れ海の幸が豊かでキラキラ光る美しい伊豆の海を見遣る作者、故郷に対する愛着と安定そして豊かな人生を歩んだ作者を感じる。

大黄銀杏胎蔵界へ降る異変

新庄 佳以

袋井市 鈴木あさ子

樹木にも身体にも神靈が宿るとしている樹木崇拜がある。この句には魂が宿る生命体のような感がある。大黄銀杏が母胎なのだ。

そして、異変とは空想の世界なのか、現実なのか、大黄銀杏の木肌が妖しく見えてくる。

目標の一つ上ゆく立葵

山下 和子

静岡市 高橋 範子

梅雨から夏へ橋渡しをしてくれる立葵。

静岡市の花でもあり、上まで咲くと梅雨が明けると言われています。2m程にも伸び人目を引きます。わが町にも毎年丹精込めた花が咲きます。

目標の一つ上ゆくとは言い不得て妙、清しい立葵に教えられ一步を進もうとしている前向きな作者を感じました。

憎むこと忘れておりし蕗を煮る

渡辺 郁子

富士市 渡邊 弘美

蕗を煮るには、ひと手間かかる。塩を振り板摺り。茹でて皮を剥き筋を取り、暫く水にさらすまでが下処理。だから、『ヒボウチユウショウ』などしてはいられない。おまけに、煮上がった蕗のほろ苦さは、大人にしか味わえない旨味である。昔ながらの手仕事は人を「憎む」ような暇を潰してくれる。作者は生き上手な人なのだろう。

コロナ禍のロイ

浜松市 喜多 周子

ロイは日本滞在十三年の英国人である。職業は英語教師。五十五歳で独身のビーガンだ。彼の持ち来る世界のニュース群は何時か繋がり合い、時代や文化、時空を軽く超えるのだった。

だがコロナ禍は私立大学の公開講座を全て閉鎖に追い込み、就労ビザの更新は宙に浮いた。ビザの容易な取得より講座内容の継続維持に拘つた。

ズーム会議は全員設定に努力を要したが、拘りの内容で月一回今も開かれている。ロイは妥協してビザを取得した。

ある時、帰国するのかと不躊躇に尋ねたら意外な答えが返った。自分の国はここだと言うのだ。自分の国とは何なんだろう。人の心はどこまでも自由なのだ。

私達は変動するグローバル資本主義の中で生きていく。全ての果実が平等に分配される訳ではない。或る日のロイは傷付く男を助けることが出来なかつた。浴槽に湯を足しつづけ入る花野傷痕に縫い込む魂冬の月

諸家近詠 増補頁

異変

静岡市 新庄 佳以

秋の川

浜松市 原 百合子

中部文学散歩が中止となつたため、諸家近詠と鑑賞のページを増やしました。急なお願いにもかかわらずご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

彼岸花

島田市 鈴木 和枝

告知

伊東市 増田 明美

空っぽの電車見送る彼岸花
ぼちぼち介護車帰るころ彼岸花の夕
介護車通過それでも直立彼岸花

もうひとり乗れさうですか茄子の牛
竹春のゆれる心に毒を盛る
此岸いま素秋の風のきらめけり

芋の露われに透視の力欲し
怯むことなし達観の羽抜鶲
金色の鯉にも秋思ありぬべし

八頭

周智郡森町 友田喜美子

水中花は死を云はず

袋井市 神野 裕子

稻架解くや男と女両端に
八頭これはこれはと俎板に
金琵琶の風にのりたり樹木希林

水中花望みを叶へ死を云はず
幸ひと思ふ孤もあり白牡丹
負の世界薰風背負ひ疾走す

秋の声

静岡市 川崎 里子

星月夜

周智郡森町 友田喜美子

水中花は死を云はず

袋井市 神野 裕子

花街の蔵の鉄扉や曼珠沙華
命数を字画に託す三日月
こびりつく櫃に麦飯秋の声

稻架解くや男と女両端に
八頭これは這是と俎板に
金琵琶の風にのりたり樹木希林

水中花望みを叶へ死を云はず
幸ひと思ふ孤もあり白牡丹
負の世界薰風背負ひ疾走す

無題

焼津市 川嶋安起夫

静岡市 中村 道子

秋を得て

袋井市 堀江 康士

執念深き敵は歟座 ムヒを塗る
蠟燭消し亡友ともと詩で遊ぶ 晩夏
流刑地に聖人の跡 草紅葉

星月夜永久凍土の緩みかな
二人してネコバスを待つ星月夜
古手紙読んでは涙星月夜

無縁墓忽と咲きけりきつね花
猿酒に酔ひ童宮をさまよへり
遠洋の船溜りを得海猫ごめ残る

すさまじき紅葉炎えしと漢の来
神無月水に沈みしシャンデリア
大黄銀杏胎藏界へ降る異変

ポケットに夢の欠片や彼岸花
諸掘りし小さき軍手も干しにけり
もう跳べぬ幅となりたる秋の川

鑑賞

すさまじき紅葉炎えしと漢の來

新庄 佳以

「漢」を使うと、大胆さとか勇猛さの際立つ男性を思う。この対比でメタセコイアの紅葉した森が心に浮かんだ。場面の転換に一筋縄でゆかぬ屈折感がある。

怯むことなし達観の羽抜鶴

加用 富夫

羽抜鶴（鳥）は、時に自信のない外観を呈する。しかし、作者はその内の強靭な生命力を見ている。直撃性が確かにある。

（静岡市 滝浪 武）

彼岸花

鈴木 和枝

八頭これはこれはと俎板に 友田喜美子

もう跳べぬ幅となりたる秋の川

原 百合子

空っぽの電車見送る彼岸花
ばちばち介護車帰るころ彼岸花の夕

介護車通過それでも直立彼岸花

中七「これはこれは」とから、八頭を尊

若い頃には渓流釣りを楽しめたのに、今では、街中の水溜りさえ思うように跨げない有様で情けない歳に私もなりました。

同様に来し方を振り返つての一句かと目にとまり、それでも冬の川でなく秋の川と、作者の深い心の底に句の本質を感じました。足元に気を付け秋の野山の景色を心ゆくまで散策してみたいと思っています。

（沼津市 東城 保子）

た。

（袋井市 鈴木あさ子）

花街の蔵の鉄扉や曼珠沙華

川崎 里子

もうひとり乗れさうですか茄子の牛

此岸いま素秋の風のきらめけり 増田 明美

曼珠沙華とは梵語で赤い花の意という。彼岸が過ぎると赤い花は一斉に消え失せ

茎だけが立ち並び、冬に深緑色の線状の葉を多数叢生するが翌年の春には枯れる。不吉な別名が多いのもこの不思議な咲き方と花の色によるものだ。作者は、花街と曼珠沙華という妖しく謎めいた「柔」と藏と鉄扉の「剛」を一句に見事に詠み込んだ。

（静岡市 秋本恵美子）

年をとるにつれ親しい人との別れが多くなるのは悲しいことだ。友人知人、親族そして家族。作者は親しい方を続けて亡くされたのかも知れない。上五中七の措辞にそのことを感じる。この呼びかけのやさしさが胸に響く。

二句目は、今生かされている我が身を振り返り、素秋の風の中に命のきらめきを感じている。

（浜松市 つづ 葉子）

中七「これはこれは」とから、八頭を尊いものとして大切に扱い、俎板に向かつている作者の姿がダイレクトに想像される。子孫繁栄、人の「頭」に立つようと、縁起物でおせち料理にも使われる八頭だ。

幸ひとと思ふ孤もあり白牡丹 神野 裕子

「幸ひとと思ふ孤」は、孤高の人が持つものだ。誰にも寄りかからず、自由に自身の価値観で物事を決定し、アイデンティティが確立される。真っ白で際立つ存在感のある季語「白牡丹」との取り合わせが絶妙だと思います。

（富士市 田中由美子）

新会員紹介

静岡市 大石 恒夫

糸電話水の星の神話聞く
極月のシフォンのような陽が沈む

身の奥の泪もろくて去年今年

静岡市 山本 敏子

参考書ひろげちらかす獺祭忌
瑞相に心ほぐれる曼珠沙華
秋分の日に供へたる萩の餅

静岡市 山本まさゆき

噴水の繰り返してゐる火の記憶
夏燕かつて墓原であつたとか
人の骨ここにもあると街の蟬

浜松市 尾内 以太
おとといはきのうの余り零余子飯
雨よりも遠く貝割菜は濡れる
握りしめ紫蘇の実のほかこぼれざり

静岡市 土屋 悅子

解除後の巷賑はふ秋灯し
貴重なる「北限の桃」友あらば
かさごそと樂にも聞こゆ落葉風

富士市 貫名ともみ
老犬と語りつくして夜の長し
夫は釣吾は小春の読書人
赤とんぼあの世この世を行きもどる

生き生きと詠まれて居り、誠実な人柄が偲ばれる作品になつてゐる。句集は年代毎に五章に分けられている。

稽田にして異草を許さざる

(合掌)

颶風の矢面に立つ案山子かな
世に同じ樹なし幹なし桜咲く

寒卵覇氣ある者は輝けり
寒砂丘不壊の一歩の刻まれる

(独行)

母の日の母と対峙の句会かな

校庭の樹も総立ちの運動会

(帆船)

ご破算もよし還暦の年新た

二人展出て紅白の梅仰ぐ

(沈黙)

シリウスの申し子として星流る
かにかくに母は逞し冬木の芽

(沈黙)

沈黙を守る海溝去年今年

(沈黙)

爽やかに無理難題を引き受ける
球体の球体なる寒卵

(球体)

絵心も詩心も乗る花筏
露の世を生き抜き永久に眠りたる

(花筏)

〈獨行〉の蟻が突つ切る蟻の道 昌平〉に

より句集の題名とされた由、あとがきにあり、常に相手を慮る立ち位置を意識して来られた様ですが、「獨行は明日からの私の野心です」との告白によつて、作句に新たな視点が示される事を期待致します。

(独行)

竹 美玲 句集

『俳句の明日—パリの虹』紹介

金子 徹

「パリも好き、太陽も好き、という作者の
弾む心が感じられる」と、美玲句集の感想
を述べられている。まさにこの句集の感想
を代表することばである。

冬薔薇ぐちやつと咲いていて自由
すつと水仙ずっと人間 愛すかな
蝶々のリズムで日向出来上がる

「俳句の明日」という表題は大きいが、
この書は、作者自身の「明日の俳句」と解
したい。句歴はまだ浅いが、句に自分らし
き、自分軸を作りたいと果敢に挑戦した句
集と言えよう。

タイ、南米、パリ、ハワイ、日本の伊勢
志摩を旅した時の句、それに句作りを始め
た頃から現在に至るまでの諸々の句を、ま
とめたものである。

虚無僧をバイクに乗せてスコール来
朝霧を脱ぎて仏塔現わる
大河流る蝶と一緒に船の中
大地から霧吹き上げるイグアスよ
太陽が元気になつてパリに夏

作者のことばによると「……自分と同じ
歳ごろの友人が亡くなり、心細くなり、早
めに句集をまとめてみる気になつて……」
とある。句集の帯文に「旅行記のような樂
しい句集ができました。」とあり、「太陽が
元気になつてパリに夏」の句が添えられて
いる。同じ帯文に細井啓司さんの評があり、

大賞

木のベンチ

森須 蘭

第四回口語俳句作品大賞決まる

棒高跳びの棒撓りきり蝶生まる
キーボード叩く軽さの揚雲雀
春包むクレープ外出禁止令
あめんぼう明日はいつも目分量

蟬の穴青空とても深かつた

帰省する手刷りの夕焼空の中

とんぼうの瞳の中に住む一茶

冬林檎今ならやさしさを言える

凧あげて引いて引かれて私も空

たんぽぽの返事つぎつぎ運動靴

青梅の微熱を溜める木のベンチ

万縁や風の呼吸が加速する

入道雲の余白自転車こいでいる

金木犀一人芝居のたたずまい

大根を煮ている夜を煮詰めている

奨励賞

残された影 久光 良一

みんなわかつてくれている足の裏の硬さ
流れ解散した広場の残された影になる
今日のことは今日終えて花に水やる

奨励賞

蓮根の匂い、肉の味 月波 与生

蓮根を食べると穴の味がする
空き瓶に誰でもよかつたを詰める
ボランティア終わり乾電池に戻る
戦争も平和も肉を焼く匂い

奨励賞

あかんたれ 富田 潤

エーンヤコラ蟻の一揆がはじまるぞ
おどけては茅の輪をくぐる異邦人
打水にも慣れて風呂屋の婿養子
ゴキブリに笑われているあかんたれ

〔事務局より〕

【新入会員】（敬称略）

内藤小夜子（焼津市）令和三年十月
〔行事報告〕

①中部吟行文学散歩

令和三年十一月十三日（土）駿府城公園
を吟行地として開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて中止としました。

②静岡県現代俳句協会役員会

令和三年十二月四日（土）に予定されていましたが、新型コロナウイルスの感染状況を考慮し、中止としました。ただし左記の通り来年二月に実施します。

〔行事予定〕

①静岡県現代俳句協会役員会

日 時 令和四年二月五日（土）

午後一時三十分

会 場 静岡市「あざれあ」

②令和四年度静岡県現代俳句協会定期総会

日 時 令和四年三月五日（土）

午後一時三十分

会 場 静岡市「あざれあ」

総会後「一句会」を行います。

編集室からのお願い

次号一三一号（四月発行の予定）の執筆予告をさせていただきます。ご協力の程、お願い申し上げます。

執筆予告（敬称略）

○卷頭隨想 事務局長 つげ 葉子
○わが俳句工房 幹事 永井千恵子
○エッセイ 幹事 植田しづ子
○諸家近詠（全員参加の名簿順）

井上 花風・田中由美子・つげ 葉子
東城 保子・平野摩周子・村田 明王
松山 好江・萩山 栄一・羽田 知行

○一句鑑賞 今号（一三〇号）の諸家近詠の中から一句選び鑑賞文をお願い致します。

久田 洋子・宮下 艶子
岡部 木青・花房 なお
○新会員の紹介（近詠 三句）
内藤小夜子

詳細につきましては、別途、該当の方宛てに、令和四年二月頃、連絡させていただきます。

—編集後記—

コロナ禍の暗い気分の日々、二人の若者の活躍が爽やかな風となつて、心を吹き抜けた。そう、二刀流でMVPに輝いた大谷翔平選手と将棋の藤井聰太四冠。二人と共に通しているのは「野球が好き」「将棋が楽しい」という少年のような澄んだ瞳を失わないことだ。子曰く、で始まる論語を思い出す。「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず。」

俳句を学び、俳句をますます好きになり、何より俳句が楽しみ、になるよう、日々精進していくこうと、と改めて思う私です。今号は、文学散歩の中止を受け、諸家近詠を急速増やし、役員の方々に鑑賞文をお願いしました。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。また。

静岡県現代俳句協会会報 第一三〇号
発行 令和三年十二月二十五日
発行人 滝 浪 武
編集人 田 中 由 美 子
事務局 つ げ 葉 子
〒435-0034 浜松市南区安松町六三一
電話・FAX ○五三一四六二一〇五〇八